

開館45周年記念

鉄斎の祭礼図



8 四祭図 右隻

前 期 2020年6月28日(日)～8月2日(日)
 後 期 2020年8月23日(日)～10月4日(日)
 會 場 鐵齋美術館別館「史料館」
 開館時間 9時30分～16時30分
 休館日 水曜日・展示替期間



8 四祭図 左隻

四季折々に催される日本の祭は、伝統を継承しながら時代とともに変容してきた。近代日本においても、幕末の動乱と明治維新による近代化が祭に多大な影響を与えたことはいままでもない。とくに神仏習合の形態をとる社寺は、神仏分離政策と改暦によって、組織や行事の変革を余儀なくされ、なかには荒廃していくものもあった。こうした時代を生き、敬神崇仏の念に篤かった富岡鉄斎（1836～1924）は、衰退の一途を辿る社寺の実情に向き合い、独自の立場から調査研究することに努め、多くの祭礼図を描いた。

京都と鉄斎 天保7年（1836）、鉄斎は京都三条通室町衣棚町で代々法衣商を営む八代目十一屋伝兵衛維叙と絹の次男として生を受け、数え89歳で没するまで生涯のほとんどを京都で過ごした。神道・儒教・仏教の教えを基盤に老荘思想を取り入れた石門心学を家学とし、学問を重んじる富岡家で育った鉄斎は、国学・漢学・儒学などを修め、画についてもさまざまな流派に学び独自の画境をひらいた。

慶応2年（1866）、明治維新以前の京都を描いた作品に《名勝十二月図》(No.1)がある。桃の節句、灌仏会（花まつり）、重陽の節句など広く親しまれる伝統行事や、伏見稲荷大社の初午、上賀茂神社の加茂競馬、祇園社の祇園御霊会（現八坂神社の祇園祭）といった社寺祭礼に加え、京都に古くから根付く萬歳舞やお火焚きのような民間行事を洒脱に描く本図からは、鉄斎が都の四季を彩る行事に親しんでいたことが窺える。

鉄斎は、明治9年（1876）5月に大和石上神社（現奈良県天理市）の少宮司、同年12月に和泉大鳥神社（現大阪府堺市）の大宮司に任命され、大鳥神社や堺市内の荒廃した神社の復興に心血を注いだ。在任時の作である《大鳥神社神幸図巻》（『鉄斎研究』第22号-3）に描くのは、同10年7月に行われた大鳥神社神輿渡御の行列で、この祭は明治維新以降中断していたところを同8年に再興されたばかりだった。大宮司であった鉄斎は、後世のために自ら筆を執り、これを記録したのであろう。

明治14年、官を辞して帰洛した鉄斎は、翌年には京都室町一条を永住の地と定め、書画揮毫を中心とした生活に入った。学識者として美術界との関わりを深める傍ら、太秦広隆寺の牛祭を再興し、荒廃していた嵯峨車折神社の宮司を明治21年より務め、一乗寺の詩仙堂、東山の西行庵などの再建にも尽力した。

四祭図 二曲一双屏風《四祭図》(No.8)に描かれた社寺祭礼を、鉄斎のエピソードとともに紹介したい。本作は明治中期の作で、右隻一扇から順に祇園祭、鍋冠祭、やすらい祭、牛祭を描く。

祇園祭は、疫病退散を祈願して京都祇園の八坂神社で行われる夏の大祭で、日本三大祭の一つとして広く知られている。本図で描かれるのは、祇園祭の神幸祭・還幸祭のうち、重厚な武具甲冑を纏った「弦召」による武者行列である。弦召とは中世の頃より祇園社に従事した神人で、祭では神輿渡御の先導を務めた。絢爛豪華な山鉦巡行ではなく、本来の主役である神輿渡御の魁を担う武者行列を画題とするのは、社寺祭礼の本質を追求した鉄斎の見解であろう。祇園祭に関連した作品に《八坂大神号書》(No.13)がある。附属書簡（No.15）によると、八坂神社氏子区域である御幸町六角の眼鏡商玉輿透明館の依頼で書されたもので、表装の一文字には、鉄斎の所有する天明年間以前の祇園祭の神輿に用いた金襴が使用されていることがわかる。

牛祭は、陽暦10月12日の夜、京都太秦の広隆寺で執り行われていた国家安穏、五穀豊穰、悪病退散を祈願する祭である。奇祭として名高く、今日では鞍馬の火祭と後述のやすらい祭とともに京都三大奇祭といわれている。本図では、白い仮面をつけ牛に乗る主神摩多羅神が、赤鬼と青鬼の面をつけ矛を携えた四天王と、松明をふり立て鉦や太鼓を叩く従者を従えて境内を練り歩く様子を描き、賛には祭文を引用している。明治維新後まもなく、牛祭が途絶えてしまったことを嘆いた鉄斎は、明治20年（1887）、有志とともにこれを再興した。資金を募るため



1 名勝十二月図

に発行された刷物「うづまさ牛祭由来記」(清荒神清澄寺 鉄斎美術館蔵)には、祭の由来と復興趣意が記され、鉄斎の描いた牛祭図^{おわた}と大田^{おわた}がきんげつ^{おわた}の和歌が添えられている。再興後は、知友を誘って牛祭を見学し、その魅力を発信し続けた。晩年に至るまで繰り返し描く好画題の一つとなり、本図と同様にお練り^{うしまつり}を描いた作品に《牛祭図》(No3)や《太秦牛祭図》(No5)があるほか、面、祭具、お練りを記録した《牛祭覚描き帖》(No14)も遺されている。

やすらい祭は、毎年4月に京都紫野の^{いまみや}今宮神社で行われる疫病退散を祈願する祭である。図には花傘持ち、シャグマをかぶった小鬼(鼓)、大鬼(鉦)らのお練りを描き、賛には^{じやくれん}寂蓮法師の作と伝わる「やすらい花」の歌詞を書す。明治28年4月10日にやすらい祭を見学した鉄斎は、練り衆の衣装、鼓、花傘、祭壇の細部を筆録「泥中蓮華」(No19)にスケッチしている。明治中期のやすらい祭の実態を伝える貴重な資料といえよう。

鍋冠祭^{なべかむり}(筑摩神事)は、毎年5月に^{まいぼら}滋賀県米原の筑摩神社で行われる祭である。本図では、鍋を冠った女性たちが列をなして琵琶湖沿岸を歩き、御旅所から神社へ向かう姿を描いている。近江の奇祭として知られるこの祭に関心を寄せた鉄斎は、数度にわたって筑摩神社を参拝し見学した。明治31年に訪れた際には、神主と村民の厚意により、前日に終了していた鍋冠祭が鉄斎のために再執行されたという。

いずれの祭も平安時代に起源をもち、^{よこやま かざん うきた いっけい れいぜい}絵画化され、歌に詠まれてきた歴史があり、横山華山、浮田一蕙、冷泉^{れいぜい}ためか^{れいぜい}為恭など江戸時代後期の絵師らが好画題としてきた。本作には、古画に学んだ跡が見られることから、必ずしも鉄斎が実見した当時の祭をそのまま描いたわけではなく、あえて古式を取り入れていることが窺える。古典、古画によって理解を深め、自ら足を運んで祭を見学した鉄斎の描く祭礼図は、躍動感があり見る者を祭の賑わいへと誘うようである。

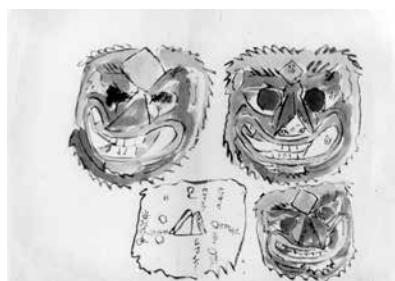
「万巻の書を読み、万里^{みち}の路を行く」ことを実践した鉄斎が見聞した祭や習俗は、関西だけでなく全国に及ぶ。なかでも明治6年の北海道旅行以降、アイヌに関連する作品を数多く描いた。残念ながら旅中にアイヌの祭を実見することは叶わなかったようだが、^{はなあきまろ}秦檜丸の『蝦夷草紙図絵』(No22)、^{えぞ}松浦武四郎の『蝦夷漫画』などに学んで描かれた^{えぞ}《蝦夷人鶴舞図》(No2)やイオマンテに取材した^{えぞ}《蝦夷人熊祭図》(No10)は、生き生きとした人物表現がおもしろい。

晩年の作《文字市若布刈神事図》(No11)は、鉄斎の元に寄せられた資料によって北九州市門司の和布刈神社に伝わる和布刈神事^{もじ めかり}を描く。まだ見ぬ未知の祭にさまざまな想像を膨らませたであろう。

本展覧会では、以上のように鉄斎が揮毫した祭礼図、祭を記録した筆録、参考資料をあわせて紹介する。現在、鉄斎が再興した牛祭はふたたび休止している。また祇園祭は、武者行列が昭和後期以降途絶えたが、一方では幕末より休み山となっていた衣棚町^{たかやま}の鷹山が復興を目指し活動している。今なお変容しつづける祭に想いを馳せながら、鉄斎が傾けた祭継承への情熱を感じていただければ幸いである。(細里わか奈)

[主要参考文献]

田中緑江『緑江叢書2の6 秋の奇祭』(京を語る会、1958年)、高橋達明「太秦の牛祭り」(『仏教行事歳時記』第一法規、1989年)、『史料 京都の歴史14 右京区』(平凡社、1994年)、奥田素子「鉄斎の太秦牛祭について」(『没後90年 富岡鉄斎展』出光美術館、2014年)、本多健一『知られざる千年の都の神々と祭り』(中公新書、2015年)、八木透『京のまつりと祈り みやこの四季をめぐる民俗』(昭和堂、2015年)、橋本章「祇園祭の山鉦と信仰」(『京都祇園祭』京都文化博物館、2020年)。



14 牛祭覚描き帖



19 泥中蓮華

《出品目録》

[書 画]

すべて富岡鉄斎筆

番号	名 称	制作年	年 齢	寸法(縦×横)cm	材質・技法	員 数
1	名勝十二月図	慶応2 (1866)	31	133.3×63.0	紙本淡彩	1幅
2	蝦夷人鶴舞図	明治時代	40代	118.7×45.8	紙本淡彩	1幅
3	牛祭図	明治時代	50代	133.3×31.4	紙本淡彩	1幅
4	魔王大僧正図	明治29 (1896)	61	34.5×93.0	紙本墨画・墨書	1巻
5	太秦牛祭図	明治30 (1897)	62	149.0×53.0	紙本着色	1幅
6	長刀鉾図	明治31 (1898)	63	38.0×26.3	紙本着色	1枚
7	一咲戯筆帖	明治33 (1900)	65	各14.4×24.3	紙本淡彩・墨画	1帖
8	四祭図	明治時代	60代	各168.4×85.0	紙本着色	2曲1双
9	春日角伐図	明治40 (1907)	72	各24.1×32.7	紙本墨画	1帖
10	蝦夷人熊祭図	明治～大正時代	70代	135.5×41.7	紙本着色	1幅
11	文字市若布刈神事図	大正5 (1916)	81	100.0×45.1	紙本淡彩	1幅
12	大原邨婦図	大正7 (1918)	83	141.8×52.1	絹本着色	1幅
13	八坂大神号書	大正9 (1920)	85	122.4×31.4	紙本墨書	1幅
14	牛祭覚描き帖	明治～大正時代		27.5×37.7など	紙本着色・墨画	1帖
15	玉透明館宛富岡鉄斎書簡	大正9 (1920)	85	17.6×38.6など	紙本墨書	1通

[器 玩]

番号	名 称	作 者	制作年	寸法(縦×横×高)cm	員 数
16	京八景図茶盒	三代一瀬小兵衛作・富岡鉄斎筆	大正3(1914)	各5.0×5.0×11.3	1双
17	通天煮茶図磁鉢	二代三浦竹泉作・富岡鉄斎筆	大正6(1917)	18.5×18.5×8.0	1口

[富岡鉄斎筆録・旧蔵本]

番号	名 称	作者ほか	制作年	寸法(縦×横)cm	員 数	備 考
18	東遊記事	富岡鉄斎筆	明治22～23(1889～90)	27.2×19.6	1冊	
19	泥中蓮華	富岡鉄斎筆	明治28 (1895)	21.0×14.8	1冊	
20	無題	富岡鉄斎筆	明治29 (1896)	24.0×16.6	1冊	
21	見聞扇囊	富岡鉄斎筆	明治30 (1897)	20.2×14.2	1冊	
22	蝦夷草紙図絵(写本)	秦檀丸著	江戸時代後期	26.2×18.8	1冊	富岡鉄斎写 明治10年代

・次回展覧会

開館45周年記念「蓮月と鉄斎」

前期：2020年10月11日(日)～11月15日(日)

後期：2020年11月22日(日)～12月22日(火)

会場：鉄斎美術館別館「史料館」

清荒神清澄寺 鉄斎美術館

〒665-0837 兵庫県宝塚市米谷字清シ1番地 Tel.0797-84-9600 Fax.0797-84-6699 <http://www.kiyoshikojin.or.jp>

令和2年6月24日 印施